

形容詞「にげなし」考

——『源氏物語』における社会通念と源典侍の自己認識を中心に——

小原みと希

一 はじめに

古典における不調和・不相応というマイナス評価を表現する形容詞「にげなし」は、どのような場においてどのような基準で判断されるものなのか。評価の形容詞からは、評価主体が自己や他者をどのように見ているのかということが見て取れる。その評価が何に則した評価であるのか。評価の形容詞を見ていくことで、その世界的内的論理が見えてくる。評価の形容詞を通して、人物たちが、どのような基準を持って、どのような認識を持っているのかを探っていくことができる。不調和の表現のひとつである形容詞「にげなし」が重要である理由は、後に分析するように「にげなし」が単に事実として不調和を伝える表現ではなく、不調和を感じている表現主体の認識が人間関係をどのように切り結んでいるかを理解

できる表現だからである。「にげなし」という表現は、作中人物の認識がどのようなものであるかを読み解くキーワードとなる。

平安時代の仮名文学17作⁽¹⁾には形容詞「にげなし」が52例あり、そのうち『源氏物語』が42例を占める。残りは『蜻蛉日記』3例、『狭衣物語』3例、『平中物語』2例、『伊勢物語』1例、『枕草子』の章段名が1例となる。『源氏物語』が長編であるとはいえ、他の作品と比べて形容詞「にげなし」の用例の大半を占めている。「にげなし」の使用状況と表現主体を確認することで、「にげなし」という言葉の仕組みやその表現価値が明らかになるだけでなく、『源氏物語』の表現の問題や人物造型に関わる問題へとつながっていく。形容詞「にげなし」とそこから展開される表現を分析し、その性質を確定し、「にげなし」から『源氏物語』の表現機構を明らかにする。

特に注目されるのは、光源氏から「にげなし」と評価されながらも光源氏と関係を結ぶ好色な老女・源典侍である。源典侍のような偏奇な人物造型を形成する方法からは、それと対照をなす人物造型が照らし返される。「にげなし」から人物造型を見ることで、『源氏物語』が何を描こうとしたのか、そして『源氏物語』を形成した内的論理がどのようなものであるのかが見えてくる。結論から言えばそれは平安の仮名文学作品を貫く論理であると考えられる。

以下、用例はすべて『新編 日本古典文学全集』『小学館』から引用し、必要に応じて私に〔 〕で補足した。

二 「にげなし」の傾向

形容詞「にげなし」の出現は、52例中、心内文で34例(65%)、会話文で11例(21%)と偏りが見られる。心内文や会話文の出現率が高いのは、「にげなし」が事物の様子を表す形容詞ではなく、事物を評価する形容詞だからである。

なお、地の文において表現される場合は、語り手による評価が挿入されていると考えられる。

契りしに変わらぬことのしらべにて絶えぬ心のほどは
知りきや

女、

変らじと契りしことをたのみにて松のひびきに音を
そへしかな

と聞こえかはしたるも似げなからぬこそは、身に余
りたるありさまなめれ。

『源氏物語』松風巻 四一四頁

ここで、語り手は光源氏と恋愛関係を結ぶ相手として明石の君を不似合いではないと評価したうえで、その「身に余」る幸せであろうと判断している。「なめり」は断定の助動詞「なり」の撥音便の無表記と推定の助動詞「めり」で、どちらも話者の判断を示す助動詞である。

係り結びの「こそ」も、話者独自の見解を伝えるという性質をもつ係助詞である。形容詞「にげなし」は地の文においても特定の話者を必要としている。ただし、これは「にげなし」固有の性質というよりは、評価の形容詞全般に言えることであろう。評価の形容詞からは視点人物としての語り手の存在を探ることもできるが、本稿では「にげなし」独自の性質を明らかにするために、物語上で焦点化される登場人物に限定し、描かれている人物の性質も鑑みながら、論をすすめていくことにする。

改めて確認すると、形容詞「にげなし」(52例)における心内文と会話文の出現率は次のようになる。

〈表1〉形容詞「にげなし」(52例)における心内文と会話文の出現率	
心内文34例(65%)	会話文11例(21%)
総計45例(87%)	

〈表2〉『源氏物語』内の形容詞「にげなし」(42例)における心内文と会話文の出現率

心内文30例(71%)	会話文9例(21%)	総計39例(93%)
-------------	------------	------------

「にげなし」は会話文よりも心内文に出現傾向がある。「にげなし」は主に心内文に用いられる言葉であり、他者に表出される言葉ではない。『源氏物語』においては、その傾向が顕著となる。

「にげなし」は特定の評価主体を必要とする。評価主体は、人物と人物、あるいは人物と事物の取り合わせを似つかわしくないと評価する。「にげなし」は主に不調和・不相応を表すが、「にげなからぬ御ほどぞかし」(蜻蛉巻 二五三頁)、「にげなからず」(横笛巻 三四九頁)などの打消の助動詞を伴うことで調和を表すこともある。調和を示す表現は10例(19%)に留まっている。

同じ表現方法としては「つきなからず」(帚木巻 七六頁)、「つきなからぬ若人」(蛩巻 二二〇頁)など不調和を示す形容詞を否定することで調和を示す例や、反対に

「似つかはしからぬ扇」(紅葉賀巻 三三七頁)、「似つかはしからぬ袖の香」(橋姫巻 一五二頁)など調和を表す形容詞を否定することで不調和を示す例が挙げられる。

「にげなし」では主にAとBの取り合わせを考え、その際には、Aという物事を中心に年齢や社会関係など何らかの基準からずれたBに対して生まれるマイナスの評価を表現している。この際、評価対象はBとなり、Aに対してBが似つかわしくないと表現される⁽⁴⁾。使用される場面を見ると、恋愛の場での使用が36例

(69%)と圧倒的に多い⁽⁵⁾。

また、「にげなし」は、恋愛の場で年齢を問題とする例が16例(44%)と最も多い。関係そのものを問題とする例が10例(28%)、また身分を問題とするものが5例(14%)、禁忌を問題とするものが4例(11%)である。その他に、美質や精神性に言及するものが2、3例見られた。「にげなし」は主に恋愛の場において年齢を問題にする傾向があると言える。

〈表3〉「にげなし」の36例(全体の69%)ある恋愛に関する用例における尺度

年齢16例(44%)	関係10例(28%)	身分5例(14%)	禁忌4例(11%)
------------	------------	-----------	-----------

「にげなし」が恋愛における使用頻度の高い形容詞で

あるということ、既に菊一恵理子『似げなし』と『おほけなし』——夕霧と柏木の恋を読み解くキーワードとして、『學習院大學國語國文學會誌』四六号、二〇〇三年）が『源氏物語』内の「にげなし」の全用例を調査したことで明らかになってきているため、『源氏物語』における全用例の確認は改めて行わない。そのかわり、本稿では同じように調和／不調和を評価する形容詞の比較検討を行い、「にげなし」の特徴を明らかにしていきたい。

三 比較検討

「にげなし」の用例を分析する前に、同じ調和／不調和を評価する形容詞「似つかはし」・「つきなし」・「つきづきし」の順に用例を確認し、定義づけを行う。比較検討によって調和／不調和の形容詞の共通項と、「にげなし」の特異な点をあぶり出す。用例は「にげなし」と同範囲から抽出した。

「にげなし」は、調和／不調和を評価する形容詞「似つかはし」・「つきなし」・「つきづきし」と使用状況が異なっている。恋愛の場における使用の割合は、同じように「ふさわしくない」と不調和を表す評価の形容詞「つきなし」と比較してみると、「にげなし」35／50例(70%)、「つきなし」9／38例(24%)と数値の上で明らか

差が出る。調和を表す評価の形容詞で比較すると、さらに数値に開きが出る。「ふさわしい」の意の「つきづきし」では3／43例(7%)、「似つかわしい」の意の「似つかはし」では4／20例(20%)となる。

〈表4〉調和／不調和を評価する形容詞の恋愛の場における使用

にげなし 35／50例 (70%)	つきなし 9／38例 (24%)	似つかはし 4／20例 (20%)	つきづきし 3／43例 (7%)
-------------------------	------------------------	-------------------------	------------------------

(1) 「似つかはし」について

「似つかはし」は、人物を評価する例は20例中14例(70%)である。評価対象の人物の性質から考え、その持物や言動が、その性質に一致する場合、「似つかはし」と表現される。

女の童のいへる

立てば立つるればまたゐる吹く風と波とは思ふど
ちにやあるらむ

いふかひなき者のいへるには、いと似つかはし。

『土佐日記』三〇頁

この童、船を漕ぐまにまに、山も行くと見ゆるを見

て、あやしきこと、歌をぞよめる。その歌、

漕ぎて行く船にて見ればあしひきの山さへ行くを
松は知らずや

とぞいへる。幼き童の言にては、似つかはし。

『土佐日記』 三七頁

いずれも形容詞述語文で話者の態度が表れており、幼さとそれに共通する言葉づかい(素朴さ、率直さ)を述べている。「童」という属性からそれに応じた言動が想定されており、基準を満たすことで「似つかはし」と表現される。調和の表現は11例(55%)、打消を伴って不調和を伝える表現は9例(45%)となる。調和を示す表現が19%に留まる「にげなし」とは異なり、ここに偏りは見られない。年齢における不調和の例を挙げると、

この内侍常よりもきよげに、様体頭つきなまめきて、
装束ありさまいとほなやかに好ましげに見ゆるを、
さも古りがたうもと心づきなく見たまふものから、
いかが思ふらんとさすがに過ぐしがたくて、裳の裾
を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならず
ゑがきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう
見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみ
じうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさま

かなと見たまひて、

『源氏物語』紅葉賀巻 三三七頁

〔光源氏と源内侍の関係を帝は〕似つかはしからぬあ
はひかなと、いとをかしう思されて、

同書 三三八頁

となり、評価対象の人物が高齢であることを問題にしな
がらも、否定的な内容を伝える意図はない。見たままの
評価を叙述した表現であり、話者の感情に根差した表現
とは言えない。

宿直人、かの御脱ぎ棄ての艶にいみじき狩の御衣ど
も、えならぬ白き綾の御衣のなよなよといひ知らず
匂へるをうつつし着て、身を、はた、えかへぬものな
れば、似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められ、
めでらるるなむ、なかなかとこそせかりける。

『源氏物語』橋姫巻 一五二頁

「似つかはし」は人物自体を評価するものではない。
特定の事柄を評価対象として選び、社会的属性など明示
的で共有可能な基準から評価している。評価対象の人物
の社会的属性(子ども、高齢者、尼、下僕)から考え、持

ち物や言動が、その性質に一致しない場合も、「似つかはし」は使用される。不調和に対する反応としては不快を示すほどではなく、否定的な感情を伴って用いられてはいない。

「似つかはし」の恋愛における使用を見ると、評価対象の人物が高齢なことを問題にして、その持ち物や恋愛関係に負の評価を下したとしても、評価対象を批判あるいは否定する文脈が形成されてはいなかった。用例は4例(20%)と少ないものの、この点は、「にげなし」を含む他の形容詞も同じである。この他にも、評価者の属する社会が共通して持っている基準によって、評価対象への評価が決まる点是他の形容詞にも当てはまっている。

したがって、こうした共通項を除くと、「似つかはし」は評価対象の社会的属性(A)が評価対象の持ち物や言動(B)に接近性があることを評価する形容詞であると定義できる。

(2) 「つきなし」について

歌や読み書きなどの教養に「つきなし」を使用すると「できない」「不得手」を意味する。この使用は地の文に登場する。

殿上人の中にも、唱歌につきなからぬどもは召し出

でて、おもしろく遊ぶ。

『源氏物語』宿木巻 四八四頁

会話文での使用状況を見てみると、

もしのたまふさまなるつれづれならば、かしこへはおはしましなむや。人などもあれど、便なかるべきにはあらず。もとよりかかる歩きにつきなき身なればにや、人もなき所についるなどもせず。

『和泉式部日記』五六頁

「これ破り隠したまへ。むつかしや。かかるもの散らむも、今はつきなきほどになりけり」

『源氏物語』松風巻 四二三頁

自分の身分や境遇に沿わない言動を自己評価するが、そこに自己を抑制しようとする意味は含まれていない。会話文において登場する際は、相手に自分の立場を伝える時に使用され、相手を直接評価する使用は見られなかった。

好ましく若やぎてもてなしたるうはべこそさてもありけれ、五十七八の人の、うちとけてもの思ひ騒げ

るけはひ、えならぬ二十の若人たちの御中にて物怖ぢしたるいとつきなし。

『源氏物語』紅葉賀巻 三四三頁

ここでは高齢者の振る舞いが年齢に対して不調和であると評価する。ただし、ここでも負の評価が負の感情や評価対象に対する否定的言動へと展開するわけではない。もちろん、負の評価が負の感情に結びつき、否定的な言動を導く例がないわけではない。

「親、君と申すとも、かくつきなきことを仰せたまふこと」と、事ゆかぬ物ゆゑ、大納言をそしりあひたり。

『竹取物語』 四四頁

評価主体である人物よりも上位者である存在であっても、その立場にふさわしくない言動をとれば、マイナスの評価が下される。ただし、「つきなし」においてマイナス評価がマイナス感情に結びつく例はこの1例のみであるため、例外的なものと言えるだろう。が、この例外からも、評価対象の言動には一定の期待が存在し、その期待が裏切られる場合に「つきなし」と評価されることがわかる。

「つきなし」は主に評価対象の属性に期待される言動(A)に対して評価対象の実際の言動(B)を評価すると期待値が最小値であることを表現する形容詞であると定義する。

(3) 「つきづきし」について

「つきづきし」は環境への適応性について述べ、場におさまるかどうかが問題とし、「言ふ」・「きこゆ」・「のたまふ」などが後続すると「もつともらしいことを言う」という意になる。言い訳や説明をする場面で使用される。こうした例は12例(28%)と一定の割合を占めている。

調和／不調和の例としては、

しるべの内記は、式部少輔なむかけたりける、いづ方もいづ方も、ことごとしかるべき官ながら、いとつきづきしく、引き上げなどしたる姿もをかしかりけり。

『源氏物語』浮舟巻 一四九頁

御前には、うちねびたる人々の、かかるをりふしつきづきしきさぶらふ。

『紫式部日記』 一三六頁

式部卿宮と聞こゆるも亡せたまひにければ、御叔父の服にて薄鈍なるも、心の中にあはれに思ひよそへられ、つきづきしく見ゆ。

『源氏物語』蜻蛉卷 二一八頁

とあるように、官職にふさわしい人物、主に対してふさわしい従者、TPOに調和する格好など、場に調和していることを評価する。他者評価する例は8例(19%)と少なく、自己評価する例も2例(5%)に留まる。人物自体を取り上げるといふよりは、評価対象である人物の様子を含めたその場全体に調和／不調和があることを問題とする。

「つきづきし」は評価対象の置かれている環境(A)に対して評価対象の様子(B)が調和しているか否かを評価する形容詞であり、環境を焦点化する点が特異であると定義する。

検討した個別の形容詞を定義づけると、「似つかはし」は評価対象の社会的属性(A)が評価対象の持ち物や言動(B)に接近性があることを評価する形容詞、「つきなし」は評価対象の属性に期待される言動(A)に対して評価対象の言動(B)が最小値の期待値であると評価する形容詞、「つきづきし」は評価対象の置かれている環境(A)と評

価対象の様子(B)の全体を見て調和しているか否かを評価する形容詞である。

調和／不調和を表す評価の形容詞は、評価主体が自分の属する社会の持つ基準に応じて、評価対象の社会的属性から評価対象を評価している。評価主体は社会の論理を内在化して、主に身分の貴／賤、老／若、あるいは男／女といった、誰でも共有可能な尺度によって評価対象を評価する。不調和を伝える場合は、それから逸脱している場合に生じるマイナス評価を表現する。が、それらがマイナス感情と結びつくことは稀である。

これらの形容詞は、評価対象に関する何らかの要素(B)に対して、社会的属性、言動、環境といった事柄(A)を問題にすることが分かった。「にげなし」は評価対象のどのような点(B)に対して、どのような事柄(A)を問題としているのだろうか。次節より検討していく。

四 「にげなし」の使用状況

「にげなし」という表現は、前述したように、主に恋愛の場において年齢を問題にする傾向がある。

我が年のほどよりも大人しき宰相中将のありさまを
など、思ひ合わせたまふにぞ、いとにげなう、ある
まじきことかなと、独り笑みせられたまひける。

ここでは若い女性と年齢の高い男性という取り合わせが「にげなし」と評価される。高齢な男が若い女と恋愛関係にあることが不調和であると判断されている。これは男性に限らず、女性が高齢である場合も同じである。今回、数値としては計上しなかったが、『枕草子』の「にげなきもの」でも、恋愛の場で年齢を問題とする事例が確認できる。

老いたる女の腹高くてありく。若き男もちたるだに見ぐるしきに、こと人のもとへいきたるとて腹立つよ。

『枕草子』「にげなきもの」一〇〇頁

ここでは、女が高齢であることと妊娠している（目に見えるほどであるから数か月以上経過している）状態で歩き回っていることが「にげなし」と判断されている。年齢が基準（妊娠の適齢期）から大幅にズレているためである。当時の女性貴族の妊娠・出産の適齢期は二十代前半に集中している。『日本紀略』新訂増補国史大系を用い、一条天皇・後一条天皇の生母や定子・彰子など生年月日の判明している女性貴族とその子どもの生年月日を

照らし合わせると、皆二十代前半に初産を経験していた。高齢出産の例としては藤原穩子が挙げられ、穩子は四十歳の時に村上天皇を生んでいる。この場合、「老いたる女」は三十歳〜四十歳の間と推定されることとなるが、例えば、『源氏物語』内の「老い」の年齢について用例分析を行った研究（重松信弘『源氏物語研究叢書V紫式部と源氏物語』補記二、「老い」の年齢 風間書房、昭和五十八年）では、「老い」の95例のうち、94例が四十歳か、それ以上を「老い」と扱うことを明らかにしている。こうした調査を踏まえるならば、「老いたる女」は四十歳くらいの女性であると考えられる。

平安時代において通常、女性貴族は家の中にいるか、（受領階級あたりの女性貴族ならば）どこかへ出仕しているかのどちらかである。「老いたる女」が身分の低さを表す言葉によって説明されていないため、彼女は清少納言らと同じ女房であり、移動しているのは宮中の中と考える。「女」が宮仕えの女房であることは、移動動詞「ありく（歩き回る）」から分かるため、四十代ほどの女房が臨月近くなりながらも宮中から退出せず、仕事を続けていると解釈できる。

高齢でありながら若い男と恋愛をして妊娠する。実家に下がるわけでもなく腹が大きくなった姿で働いているという状況である。さらに、年老いた女が若い男との恋

愛に夢中になることも「にげなし」と判断されている。貴族社会の通例から考えれば、本来、高齢者はそのような恋愛をしないこと。したとしても自己を相対化して分を弁えた態度をとることが想定される。

「にげなきもの」では、年老いた女が臨月近いおなかで歩いている様をふさわしくないことであると指摘し、その女が若い男と男女関係を持っているだけでも見苦しいのに、男に他の女性がいることに腹を立てている様は一層見苦しいと評価している。若い男と関係を持つだけでもマイナスの要素が強い。まして嫉妬をすることは高齢の女性の振る舞いとして見苦しく、マイナス評価の程度が大きくなる。

よろしからむにてだにゆゆし。まいて『いみじう』
とある文字には、命も身もさながら捨ててなむ。

『枕草子』八二段 一五一頁

いと黒うつややかなる琵琶に、御袖をうちかけてとらへさせたまへるだに、めでたきに、そばより御顔のほどのいみじう白うめでたくげざやかにて、はづれさせたまへる。

『枕草子』九〇段 一七八頁

御几帳へだてて、よそに見やりたてまつりつるだにはづかしかりつるに、いとあさましう、さし向ひきこえたる心地うつつとも思えず。

『枕草子』一七七段 三一〇頁

『枕草子』から例を引いてみても、「Aだに+形容詞、(まして)B」はAとBともに既に程度が大きい。そのうえで、Aに程度の軽いものを挙げ、Bではそれ以上に程度の大きいものが挙げられる。ここでは、まず程度の軽いものとして「若き男もちたる(こと)」を例示し、より程度の重いものとして「こと人のもとへいきたるとて腹立つ(こと)」を「見苦しき(こと)」と強調している。

若い男との男女関係(高齢での妊娠(嫉妬(怒りの表出)

整理すれば、このように見苦しさの程度が示されている。本来、「老いたる女」は年齢に応じた立ち振るまいが求められる立場にある。清少納言は、その自覚を持たない「老いたる女」に違和感を覚えている。

無論、「にげなきもの」の章段は、その是非を問うているわけではない。「にげなし」という表現は、想定される基準から逸脱した場合に使用される。老/若の取り合わせが恋愛の場において調和するものではないことは、

用例数から見ても社会通念であると言える。その不調和・不相応な関係が成立した時、人は「にげなし」という感覚を持つ。「女」を見る作者の眼は社会の眼であり、ここにおける「にげなし」という判断は社会通念の上から生じるものである。

貴族社会が持っている基準は不文律のものでありながら不変項である。その基準から逸脱することは貴族社会から逸脱することと通じている。基準は貴族社会が守っているルールであり、「老／若」、「都／鄙」、「貴／卑」、「聖／俗」など既存の社会構造から生じている。⁶⁾

恋愛という場で年齢を問題として提起する例は、和歌の中にも登場する。老いらくの恋の表現は早くも『万葉集』から登場している。

黒髪に白髪交り老ゆるまでかかる恋にはいまだ逢はなくに

〈巻四・五六三・大伴坂上郎女〉

ぬばたまの黒髪交り白けても痛き恋には逢ふ時ありけり

〈巻四・五七三・沙弥満誓〉

「六百番歌合」(『新編国歌大観』五)でも「老恋」とい

う題で、「逢ひ見ても身にやは年の積もるべき我が老いらくになしと答ふな」(八四三・有家)と詠じられている。ここで注意したいのは、和歌の中で老いらくの恋が否定的に表現されていないという点である。詠歌主体は恋に積極的である。文芸作品からみれば、たとえ高齢の恋や年齢差のある男女関係が「にげなし」と負の評価を受けるとは限らない。

『枕草子』「にげなきもの」の章段においても、本章段は「にげなきもの」と判断された評価対象に対して批判する方向には向かってはいない。ここでは「老いたる女」が若い男と恋愛する事例が挙げられている。が、全体が構築する論理を追った際に、この事例が社会的な基準(年齢)を逸脱したものとして扱われながらも、評価対象が否定されるということはない。もちろん、「にげなし」という負の評価をうけた結果、実際に評価主体と評価対象の関係に問題が生じることはある。これについては後述する。

恋愛の他にも、職業や社交の場など社会的な場面にあって「にげなし」は使用されている。

むかし、仁和の帝、芹河に御幸したまひける時、い

まはさること、にげなく思ひけれど、もとつきにけることなれば、大鷹の鷹飼にてさぶらはせたまひける。すり狩衣のたもとに書きつけける。

おきなさび人などがめそかりごろも今日ばかりとぞ鶴も鳴くなる

おおやけの御けしきあしかりけり。おのがよはひを思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや。

『伊勢物語』百十四段 二一〇頁

前に鷹飼を務めていたために、男は帝の鷹飼の御供をする事になった。鷹飼をするには自分は高齢であると思っている。男は、ひとが年齢のことで自分を咎めるであらうと思ひ、歌を詠む。「にげなく思ひけれど」の主旨は男、「にげなし」と判断しているのは男自身の年齢のことである。高齢であることが鷹飼の務めを果たすにふさわしくないと認識されている。評価主体である男が自分の年齢を「にげなし」と判断している。自己評価でありながら、そのことを咎める他者の存在が意識されている。社会の眼を持つことで自己を相対化し、「にげなし」と自己評価するのである。

五 「にげなし」という自己認識

評価主体は他者へ評価を下すだけでなく、自分自身に

対しても「にげなし」と評価を下す。社会的な場において不調和・不相応な自分の存在を認識した際にも「にげなし」という形容詞が用いられる。「にげなし」における他者評価の例は25例(50%)、自己評価の例は17例(34%)であり、自己評価の例が全体の三割を占めている。

女君は、すこし過ぐしたまへるほどに、いと若うおはすれば、にげなくはづかしと思いたり。

『源氏物語』桐壺巻 四八頁

これは主人公・光源氏と本妻・葵の上の初夜の場面。葵の上は、元服したばかりの源氏と自分の年齢の差を気にして「にげなくはづかし」と心の内に思っている。「はづかし」は相手の優位性の前に自分の劣位を感じた際の表現である。「はづかし」は「立派である」と訳されるが、ここでは帝の寵児であり血統や美質に優れた光源氏に対する劣位感情が表現されたものと考えられる。しかしながら、葵の上は左大臣家の娘であり、その血統や美質は光源氏にとっても優位性を持つものであった。葵の上は本来、身分の低い更衣の子である光源氏と自分を比べて「にげなし」とも「はづかし」とも評価される対象ではない。権力関係でいえば、後見に恵まれない光源氏はどちらかといえば劣勢で、血統の面でいえば均衡

が保たれる関係であるはずである。つまり、ここでは他者の存在が意識されているというよりは、むしろ評価主体の固有な感覚として「にげなし」が使用されている。年齢という基準はあるが、それは決して逸脱したものである。光源氏は六条御息所という愛人を持っているが、こちらの年齢差のほうが大きい。光源氏の想い人である藤壺女御の年齢も、母と子ほどの年齢である。つまり、葵の上の「にげなし」という評価は、社会通念上の感覚そのものではなく、社会の眼を内在化した自己認識の上での評価であるといえる。

「にげなし」は、評価主体の認識に社会の眼が内在化されていることがわかる自己認識の言葉と考えられる。自己を相対化してかえりみる時、「にげなし」は自己の評価として表現される。自己に「にげなし」と評価する人物は、絶えず他者がどのように自分を見ているかを気にする人物といえる。『源氏物語』の六条御息所も他者の眼を気にする人物である。

六条わたたりも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめた

る御心ざまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるることいとさまざまなり。

『源氏物語』夕顔巻 一四七頁

六条御息所もまた年齢に対して「にげなし」と感じ、人の目を気にしている。六条御息所の自己評価と葵の上の自己評価とは感情は通うものであっても、実情が異なっている。葵の上の「にげなし」という自己評価は、社会通念からすれば過剰であり、相対評価ではなく絶対評価である。例外的な「にげなし」の使用であり、過剰な自己認識としては、この一例のみである。とはいえ、葵の上や六条御息所の自己認識が光源氏との関係に亀裂を生み出す点は、「にげなし」が持つそのマイナス評価によって社会関係の進行を阻害する・断絶する・失敗するなど負の結果を導く傾向と一致している。

一方で、「にげなし」と自己評価し、抑制を促しながらも行動を抑制しない存在が若き光源氏である。恋愛の場における年齢を問題にする「にげなし」の表現は高齢である場合に限らない。年齢が低い場合にも用いられている。若き日の光源氏は、若紫巻において幼い若紫を手に入れようとする自分自身を「にげなし」と幾度も認識し、また他者からも「にげなし」と評価されると認めて

いる。しかし、認識を持って尚、自己を抑制することができないでいる。

「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえたまひてんや。思ふ心ありて、行きかかづらふ方もはべりながら、世に心のしまぬにやあらん、独り住みにてのみなむ。まだ似げなきほどと、常の人に思しなずらへて、はしたなくや」

『源氏物語』若紫卷 二一四頁

まだ幼い子どもに過ぎない若紫を手に入れようとする光源氏の言葉である。恋愛関係を持ちこむには若紫がまだ幼いことを自覚し、「にげなし」とする社会通念をも認識しながらも、行動を抑制することがない。一方、このような態度をとる光源氏に対して、若紫の保護者である尼君は、光源氏が若紫の幼いことを理解していないと思っている。尼君は繰り返し、光源氏の行動を抑制し、その逸脱を抑止することを促す。評価対象が社会共通の基準を逸脱するだけに留まらず、その認識を持たないと見なされた結果、評価者が評価対象との関係を拒むケースである。

あやしき身ひとつを、頼もし人にする人なむはべれ

ど、いとまだ言ふかひなきほどにて、御覧じゆるさる方もはべりがたければ、えなむうけたまはりとはどめられざりける」とのたまふ。「みなおぼつかかなからずうけたまはるものを、ところせう思し憚らで思ひたまへ寄るさまことなる心のほどを御覧ぜよ」と聞こえたまへど、いと似げなきことをさも知らずのたまふと思して、心とけたる御答へもなし。

同書 若紫卷、二一八頁

この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、似げないほどと思へりしもことわりぞかし、言ひよりがたきことにもあるかな、いかにかまへて、ただ心やすく迎へとりて、明け暮れの慰めに見ん

同書 若紫卷、二二七頁

光源氏は尼君の「にげなし」という認識を理であると認めながら、やはり行動を抑制しない。自己からも他者からも抑制を促されながら、それでも行動を抑制しない存在が若き光源氏である。光源氏は若紫巻において幼い若紫を手に入れようとする自分自身を「にげなし」と幾度も認識し、また他者からも「にげなし」と評価されると認めている。しかし、認識を持って尚、自己を抑制することができないでいる。

光源氏における「にげなし」の表現を追うと、社会通念を内在化した自己認識を持ちながらも逸脱するという光源氏の特性を見ることが出来る。中期の光源氏は若いころから熱をあげていた朝顔前斎院への恋心を断ち切れずにいる。もう若者ではないという老いの認識が光源氏自身にも訪れながらも、諦めきれない様子がうかがえる。ここでは、若かりし日のような恋愛をする年齢でないことに「にげなし」と自己を評価している。

たち返り、今さらに若々しき御文書きなども似げなきことと思せども、なほかく昔よりもて離れぬ御気色ながら口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、えやむまじく思さるれば、さらがへりてまめやかに聞こえたまふ。

『源氏物語』朝顔巻 四七八頁

このような「にげなし」における自己評価の表現は17例(34%)ある。いずれも心内文に限定され、他者に明示されない。自己認識としての「にげなし」という表現は、対外的なポーズとして自己評価を示す言葉ではない。自己を制御・抑制する言葉として機能する。

頭で理解しながらも心がコントロールできない状況を何とかしようと、自分に言い聞かせる表現として「にげ

なし」が使用されることもある。薄雲巻において、光源氏は六条御息所の忘れ形見である斎宮女御への恋心を抑えようとする。斎宮女御は、かつての恋人の娘であり、今や冷泉天皇の女御である。禁忌を恐れ、社会からの逸脱を恐れる理性からの要請が「いと似げなきことなり」と表現される。

かうあながちなることに胸ふたがる癖のなほありけるよ、とわが身ながら思し知らる。これはいと似げなきことなり、恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど、いにしへのすきは、思ひやり少なきほどの過ちに仏神もゆるしたまひけん、と思しさますも、なほこの道はうしろやすく深き方のまさりけるかな、と思し知られたまふ。

『源氏物語』薄雲巻 四六四頁

光源氏の息子・夕霧も、偶然目にした父の妻である紫の上を忘れられず、恋焦がれ、苦しむ。

道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。空のけしきもすぎきに、あやしくあくがれたる心地して、何ごとぞや、またわが心に思ひ加はれるよ、と思ひ出づれば、いと似げなきことなりけり、あなものの狂

ほしと、とざまかうざまに思ひつつ

『源氏物語』野分卷 二七〇頁

光源氏と夕霧の「いと似げなきことなり」という独白は自分を抑制しようとする言葉である。社会的逸脱を回避しようとする際に、まったく同じ表現が使用されていることが注目される。どちらも社会の眼を内在化しており、社会の眼で自己を評価しているのである。

自己評価としての「にげなし」という表現は、対外的なポーズではなく、評価主体の内面に向けられ、自己を制御・抑制する言葉として機能するものである。

六 自己認識を持たない存在・源典侍

一方で、他者の眼を意識せず、自己を抑制しない存在もいる。『源氏物語』紅葉賀巻における源典侍は、光源氏の父・桐壺帝に近侍する高齢の女官であり、その地位は内侍司の次官の典侍である。

年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく心ばせありて、あてにおぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、かうさだ過ぐるまで、などさしも乱るらむといふおしくおぼえたまひければ、戯れ言いひふれてこころ

みたまふに、にげなくも思はざりける。あさましと思しながら、さすがにかかるもをかしうて、ものなどのたまひてけれど、人の漏り聞かむも古めかしきほどなれば、つれなくもてなしたまへるを、女はいとつらしと思へり。

『源氏物語』紅葉賀巻 三三六頁

「森の下草老いぬれば」などと書きすさびたるを、（…）にげなく、人や見つけんと苦しきを、女はさも思ひたらず。

君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも ◎
と言ふさま、こよなく色めきたり。

「筐分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ
わづらわしさに」とて立ちたまふをひかへて、
「まだかかるものをこそ思ひはべらね。今さらなる、身の恥になむ」とて泣くさま、いといみじ。「いま、聞こえむ。思ひながらぞや」とて、引き放ちて出でたまふを、

同書、三三七頁

風冷やかにうち吹きて、やや更けゆくほどに、すこしまどろむにやと見ゆる気色なれば、やをら入りくるに、君はとけてしも寝たまはぬ心なればふと聞きつけて、この中将とは思ひよらず、なほ忘れがたくすなる修理大夫にこそあらめと思すに、おとなおとなしき人に、かく似げなきふるまひをして、見つけられんことは恥づかしければ、「あな、わづらはし。出でなむよ。蜘蛛のふるまひはしるかりつらむものを。心憂くすかしたまひけるよ」とて、直衣ばかりを取りて、屏風の背後に入りたまひぬ。

同書、三四一頁

若き光源氏に対して老いた源内侍が恋の歌を詠む。この場合、「にげなし」という認識を源氏が持って、人目を気にするのに対して、そもそも源典侍はそのような認識すら持っていない。自己認識を持つものと持たざるものがはっきりと分かれている。「にげなし」と認識しながらも源典侍と関係を持った光源氏は人に露見することを恐れている。やはり、「にげなし」という表現は人の目を気にする表現なのである。

この例からは「人」の存在が意識され、他者からのマインズ評価を懸念する評価主体の心の動きが確認できる。ここでも、自己に対して「にげなし」と評価を下してお

り、評価者と評価対象は一致している。「にげなし」は、他者へ評価を下すだけでなく、社会的な場において不調和・不相应な自己の存在を認識した際に自分自身を評価している。

自己認識として表現される際に「にげなし」が絶えず自己の内面に向けられる言葉であるのは、社会構築上、関係の構築が好ましくないという外からの制限を意識するため生じるのである。光源氏は源典侍に対してふたりの関係性を「にげなし」と伝えない。「にげなし」という対外的な評価は、社会関係の構築を阻害する恐れがあるためである。実際、光源氏はのちに源典侍と共寝をして、関係を発展させることになる。「にげなし」と評価しながらも、それが表面化されなければ、その関係が断絶するとは限らないのである。

『平中物語』では、男女が和歌の応酬を重ねながらも「にげなし」と伝えたことで関係がそれきりになった例がある。

また、この男、人ともいふに、返りことはするものから、あはでほど経ければ、男、

われのみや燃えてかへらむよととも思ひもならぬ富士の嶺のごと

女、返し、

富士の嶺のならぬ思ひも燃えば燃え神だに消たぬ
むなし煙を

また、男、返し、

神よりも君は消たなむたれによりなまなまし身の
燃ゆる思ひぞ

また、女、返し、

かれぬ身を燃ゆと聞くともいかがせむ消ちこそし
らねみづならぬ身は

かう歌もよみ、をかしかりけれど、「まめやかに、
にげなし」といひければ、いひやみにけり。

『平中物語』 四七六頁

二首目は『古今和歌集』(雑体、一〇二八番歌)誹諧歌
に紀乳母として採録される。紀乳母は陽成天皇の乳母で
ある紀全子である。陽成天皇は『日本紀略』によると貞
観十年(八六八年)生まれである。平中は『古今和歌集目
録』によると寛平三年(八九一年)に内舎人に任ぜられる
ため、陽成天皇とはほぼ同年か年下であると推定される。
したがって、「女」と「男」は母子ほどの年齢差があっ
たと理解される。ここでは「にげなし」という評価が
「女」から「男」に伝えられている。「にげなし」と告げ
ることが関係の拒否として受け取られているのである。
「にげなし」の会話文における使用は11例あり、全体の

22%を占めるものの、相手に直接「にげなし」と伝える
例はこの1例のみとなっている。

光源氏が心の中で繰り返し「にげなし」と言いながら、
源典侍にそれを伝えようとはしないのは、関係の構築が
困難になるほどに「にげなし」が厳しい評価の形容詞で
あるためである。「にげなし」は人事を比較検討して不
相応とする評価を下す表現であるため、比較された評価
対象の心象を悪くする恐れがある。「にげなし」におい
て、評価主体は本音をありのまま述べ立てることはない。
評価対象との不和を避けるためと考えられる。

光源氏の妻のひとりである花散里は、源典侍とは対照
的な歌を詠む。

その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日や
ひきつる ◎

とおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあ
らねど、あはれと思したり。

にほどりに影をならぶる若駒はいつかあやめにひ
きわかるべき

あいだちなき御言どもなりや。(…)け近くなどあら
ぬ筋をば、いとにげなかるべき筋に思ひ離れはてき
こえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

花散里は「容貌まほならずおはしける」(少女卷、六七頁)ものの、「おいらかにらうたげ」(濤標卷、二九九頁)な女君という特徴を持っている。ここでは男女関係を結ぶには年をとったということを一般的な価値基準から判断する。源氏が花散里のもとへ泊まりにやってきた夜、ふたりは間に几帳を隔てて別々に寝ていると記されている。

花散里は「にげなし」という認識を持つが故に、男女関係を遠慮している。社会通念を内在化した認識が行動を抑制し、想定される男女関係の基準から逸脱しない。「にげなし」という感覚を持つ花散里は、それを持たない源典侍と対照的に振る舞う。◎で示した「その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつる」という花散里の歌と、先に挙げた光源氏と源典侍のやりとりの場面に見えた「君し来ば手なれの駒に刈り飼はむさかり過ぎたる下葉なりとも」という源典侍の歌は、どちらも『古今和歌集』の「大荒木のもりの下草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし」(雑歌上、八九二番歌)を本歌取りしたものである。もともと老いた女性が男性から言い寄られないことを伝える諷刺の歌であったものを、源典侍は同情を引くことで男女関係を持つとする歌に変

化させ、花散里の方では我が身を自虐することで男女関係から身を引く歌として詠まれている。「にげなし」という認識があるか否かで本歌の受け取り方が大きく変化しているのである。

老女・源典侍のほうは、家柄や美質、教養に優れる存在であるが、その好色さが際立っていることが強調される。「光源氏が」にげなく、人や見つけんと苦しきを、女はさも思ひたらず」とあるように、社会通念からすれば男女の関係を結ぶ年齢ではないものの、源典侍は自らの年齢に捉われず、性を解放している。光源氏は源典侍との関係を繰り返し「にげなし」と評価し、「恥づかし」と感じているが、源典侍は社会通念から自己を評価していない。それどころか、源典侍にとっての「恥」とは、言い寄った男につれなくされる女の「身の恥」として表出され、「にげなし」という評価などは思いもよらないことなのである。

これまで述べてきた通り、源典侍のような自己認識を持たない存在が社会から放逐されたり、否定されたりするとは限らない。もちろん、「にげなし」の用例からわかるように、人々は社会的な基準から逸脱する存在に対して秩序の乱れを感じし、自分自身の行動あるいは他者の行動を抑制しようとするなどの反応を示している。が、

人間関係や個人にとって、秩序が守られること、逸脱した存在を放逐することが必ずしもプラスになるわけではない。社会関係が身分や年齢という基準に従って構築されるとは限らない。社会構造上、不変的な基準を持って線引きをしながらも、機械的に関係を切り結ぶのではなく、情緒的に関係を取捨選択している。それは特に恋愛という二者間の社会関係に顕著である。

源典侍は光源氏との恋愛においてはその年齢差が問題視され、「にげなし」と評価される存在であるが、源典侍は光源氏や光源氏の好敵手である頭中将と男女関係を結びながらも、典侍という地位にあって、その社会的立場が揺らがされることはなかった。桐壺帝も承知したうえで、咎められることもなく、源典侍は最後の登場となる朝顔巻においても光源氏と自分の関係を不相応であると思うこともなかった。源典侍は、社会通念から自己を評価する「にげなし」のような自己認識を持たない人物として造型されているのである。

七 おわりに

「にげなし」とは社会通念を内在化した自己認識を表す形容詞である。評価対象が結ぼうとする社会関係(B)に対して、評価対象の立場(A)を問題とする。評価対象が結ぼうとする社会関係は社会通念から形成される基準

に当てはめられる。社会的な基準から大きくズレたものに対してはマイナスの評価が下される。特に恋愛の場面において年齢を問題にする傾向があり、通常、恋愛をする年齢ではないと判断されるときに「にげなし」と評価される。社会関係を「にげなし」と評価する場合、関係の構築が阻害される・断絶する・失敗するなど負の結果につながることもある。

「にげなし」という表現を使用する評価主体は人目を気にしており、個人の気持ちよりも社会がどのように思いうかということを重視する。評価主体は社会の眼を内在化し、社会が共有している価値基準によって対象を評価している。

他者評価の場合は不快感を示す表現となり得るため、「にげなし」という評価は評価対象に対して直接表現されるものではない。一方で、自己評価の場合、社会通念を内在化した認識から自己の立場を捉えようとするため、自己に理性的な行動を促す表現となる。

『源氏物語』における「にげなし」を調査した結果、「にげなし」は自己認識を持つ人物と、それを持たない人物で書き分けられていることが明らかとなった。「にげなし」という自己認識を持つ葵の上や六条御息所、花散里のような女性たちは光源氏との恋愛関係に対して消極的であり、「にげなし」という自己認識を持たない源

典侍は積極的に関係を結ぼうとする。「にげなし」という自己認識を持つ人物たちは、社会の論理に照らした基準で動き、恋愛の場においても自分の気持ちを優先することはない。「にげなし」という自己認識を持たない源典侍は、恋愛の場で個人の自由を謳歌しているのである。しかし、社会が共有する認識を持たないからといって、社会からつまはじきになるわけではない。「にげなし」は他者を排除する表現ではなく、社会の論理に則して自己を抑圧し統御しようとする表現である。社会通念を内在化した認識として、他者(世間)に不快感(不利益)を与えまいと評価者の心のうちに機能する。「にげなし」という自己認識の深化は、社会の論理を優先して自己を抑制するのである。一方、自己認識を持たない者は個人の気持ちに対して屈託がない。源典侍は光源氏から社会が共有する価値基準を持たない人物であると評価されながらも、自己認識の欠如のために光源氏との関係に葛藤することなく、『源氏物語』の中でひたすらに光源氏との関係を結ぼうとする。

「にげなし」から『源氏物語』の人物造型を見ると、社会の論理の中での生き方が見えてくる。社会通念を認識し、それを内在化する者は、他者からどのように思われるかを意識するあまり、人間関係を結ぶ際に葛藤し、苦悩を抱える。『源氏物語』は貴族社会の中に生きる人

間の息苦しさを描いている。そして、源典侍は、その主
題から切り離される点で特異な存在であり、切り離され
た存在であるからこそ、そこに雁字搦めになっている人
物たちと対照化される。貴族社会に生きることの息苦し
さという主題は、同じ平安時代の仮名文学作品を読みと
く上でも重要な問題である。社会の実相が作品に及ぼす
ものを擱んではじめて、作品の意味が浮かび上がって
くる。貴族社会で共有される基準は不文律でありながら不
変項である。基準から逸脱することは貴族社会から逸脱
することを意味する。社会通念を自分のうちに取り入れ、
内在化させることは、自分の属する社会のルールに従っ
て生きるということである。個人の自由は限定的なもの
となる。評価の形容詞「にげなし」は、このような社会
の論理を反映した認識であったとし、本稿の帰結とする。

【注】

(1) 用例収集には国立国語研究所『日本語歴史コーパス
平安時代編』を使用した。『日本語歴史コーパス 平安時
代編』が収録する仮名文学作品は以下の16作品である。
古今和歌集・土佐日記・竹取物語・伊勢物語・落窪物
語・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式
部日記・平中物語・堤中納言物語・更級日記・讃岐典侍
日記・蜻蛉日記・大鏡。全てのテキストに読み・品詞な

どの形態論情報が付与されているほか、本文には地の文・会話・和歌の種別、話者の情報(『源氏物語』のみ)等が付与されている。ここから形容詞「にげなし」49例が確認できた。そのうちの42例は『源氏物語』のもので、残りは『蜻蛉日記』3例、『平中物語』2例、『伊勢物語』1例、『枕草子』の章段名が1例となる。『枕草子』では「にげなきもの」の具体例が列挙されているものの、本文には「にげなし」という表現は見られないため、これらを「にげなし」の用例としては数えず、事例としてのみ扱うことにした。なお、私に『狭衣物語』から抽出した3例を加え、計17作品より形容詞「にげなし」計52例を調査した。なお、用例はすべて『新編 日本古典文学全集』(小学館)から引用し、主語や目的語など、前後の文脈等の補足が必要な際には私に「」で説明を付した。国立国語研究所『日本語歴史コーパス 平安時代編』https://pini.ial.ac.jp/corpus_center/chi/heian.html(11) 〇二〇一年二月二日確認)

(2) 本稿が取り扱った形容詞「にげなし」の用例において、『新編 日本古典文学全集』(小学館)の校訂で「」で囲まれているものを会話文として分類し、また、「思ふ」や「思す」、これらを含む複合動詞が後続するものは心内文として分類した。

(3) 視覚情報から推定する助動詞「めり」を選択している点からも、状況を目の当たりにしていると伝える態度がある。判断を示す助動詞が評価の形容詞「にげなし」

に後続するのには性質の上で一致が理由として考えられる。

(4) 人物の容姿を見て評価する例は3例(6%)と少なく、年齢22例(42%)、社会関係11例(21%)が具体的な尺度としてまとまりを見せる。その他は身分が4例、能力が2例、行動が1例となる。

(5) 恋愛の場以外では、年齢に対して職業を評価する内容が2例、噂に対して「筋違いである」と否定する1例(藤袴巻 三三六頁)が確認できる。

(6) 貴族社会の中に存在する基準が主体に内在化されている場合、以下のように表現されることがある。

「その大和言葉だに、つきなくならひにければ、ましてこれは」と言ふ、いとかたはに心おくれたりとは見えぬ。

『源氏物語』東屋巻 一〇〇頁

ここでは、出家した身で風流な遊びに手出しすることへの遠慮が見え、均衡を乱さないように配慮されている。会話の中で自己評価することで基準を持っていることを相手に明示している。自分は社会的立場を理解していることを相手に示しているのである。負の感情は、関係の構築を困難にさせる。他者がどう思うかという懸念は、他者への配慮につながる。保身のために人目を気にすることが、結果的に他者を不快にさせないことになる。

(おほら みとき 本学大学院博士課程前期)